

〈単性生殖〉のユートピア

— 埴谷雄高と澁澤龍彦の〈反出生主義〉 —

藤 井 貴 志

1 埴谷雄高と澁澤龍彦、その邂逅

二十年の世代的懸隔があるものの、共に〈異端〉の系譜に連なる文学者として文学史のダークサイドに鈍色の輝きを放ち続ける二つの巨星——埴谷雄高と澁澤龍彦。澁澤の初期習作「撲滅の賦」(『ジャンル』昭和30・7)が、二十歳の頃に読み「あとあとまでも残るような強い印象を受けた」^①という埴谷の短篇「意識」(『文藝』昭和23・10)の存在抜きに成立し得なかったことはよく知られているように、澁澤を被告の一人とする〈サド裁判〉に第三回公判から特別弁護人として加わった埴谷が、澁澤の挑発的な法廷すっぱかしに激怒した弁護人・中村稔を宥めるべく「自著を二冊献呈の署名」^②入りで持参の上、謝罪に赴いた挿話も広く知られているだろう。澁澤が埴

谷と面識を持つのは〈サド裁判〉の始まる昭和三十六年一月、現代思潮社の石井恭二の媒介に拠るものだが、毎回の裁判が跳ねた後に恒例となった酒とダンスによって両者は親交を深めていく。その後もたとえば矢川澄子が澁澤家を飛び出して谷川雁の元へ赴き、澁澤もまた高橋たか子と関係を生じて昭和四十三年三月の離婚に到る一連の出来事では、「ぼく、谷川雁、高橋和巳、三人とも埴谷雄高とつながってる男たちだよ。こんな出来事を演出したのは、埴谷雄高なんじゃないか」^③と澁澤が高橋たか子に洩らしたというエピソードまであるのだから、その〈芸術〉ばかりか〈実生活〉にまで深く澁澤の裡に食い入った埴谷の存在を窺うことが出来るに違いない。^④

「稲垣足穂、埴谷雄高、石川淳、三島由紀夫さんは澁澤がもつとも敬愛した先輩で、「日本中の人がおれを認めてくれなくても、この四人が認めてくれればいいんだ」と言っていた」との龍子夫人の

回想⁽⁵⁾にあるように、〈異端〉の先達としての埴谷に対する澁澤の敬愛は終生変わらず、一方埴谷の側も「異端者とは、昼の生活者に対する夜の思索者、明るい現在に対する暗い根源と窮極への飛翔者」と定義した上で澁澤を「完璧な異端者⁽⁶⁾」と呼び、「私にとつては『黒魔術の手帖』を書き、『毒菓の手帖』を出し、そしてまた『夢の宇宙誌』を私達に向かって送った澁澤龍彦の仕事は、深い喜び⁽⁷⁾と賛辞を惜しまない絶対的擁護者としてあり続けたのである。

ところで〈異端〉という言葉は便利なカテゴリーではあるものの、それだけでは未だ抽象的かつ曖昧な概念でもあるだろう。埴谷と澁澤は具体的に如何なるポイントにおいて〈異端〉として共振したのか、その内実がテクストに沿う形で浮き彫りにされねばなるまい。両者の文学的紐帯は埴谷がその死に到るまで書き継いだ『死霊』を舞台として検討されることになるが、〈異端〉の照準を絞るべく、まず手始めに五木寛之との対談⁽⁸⁾における埴谷の発言から参照することにしよう。

矢川澄子さんがこの間書いたので、僕は矢川さんのものを初めから終わりまで読んだのは初めてで。澁澤龍彦は子供をつくっておいておろせ、っていうんですよ。矢川君はそれで嫌になっちゃった。それを書いてますよ。僕もおろしているけれど、僕のは戦前、澁澤より大変なんです。戦前は墮胎罪というのがある。

〈墮胎〉の話柄は「武田泰淳もけしからんですよ。百合子さんも四回なんです」と飛び火し、「武田も澁澤も、本当に女房に対してはだめな男。僕の世代は本当にだめですよ、男性横暴で威張っている」と自己批判を絡めつつ展開していく。引用文中、「矢川澄子さんがこの間書いた」というのは矢川の小説『失われた庭』（平成6、青土社）を指し、「人並みの幸福なんてつまらないよね」と囁き「子孫などというよけいな荷物を一切背負いこまずに通すこと」を望んでいた「彼」に従う形で「せっかく身籠ったもの」を「人工的」に幾度も「水に流して」いったという作中の記述を、埴谷が私小説的に読解した上での発言となっている⁽⁹⁾。他にも、たとえば澁澤への追悼文の中で埴谷は「朝寝坊の彼も私も、大学の先生にならず、招待旅行をひきうけず、そして、ともに、子供をつくらなかったという頑迷な意志を生涯もちつづけた点で、一致している⁽¹⁰⁾」と語り、また松山俊太郎によるインタヴュー⁽¹¹⁾でも同じく「僕と澁澤君の共通な点は、子どもを作らなかつたこと、大学の先生にならなかつたことだ」と発言しており、澁澤と自らとを比較した上でまず見出される相同性が〈生殖〉をめぐるその態度であったことは極めて象徴的であろう。

子供を作らないという両者の「頑迷な意志」——それは時に〈墮胎〉にまで及ぶ——を〈反出生主義（Anti-Natalism）〉という概念の元に激しく共振させ、両者が〈芸術〉と〈実生活〉を循環させる

形で徹底したその主義に孕まれる批判的な潜在性を最大限に引き出すこと。埴谷の短篇「意識」が澁澤の「撲滅の賦」に与えた影響については既に簡単に触れたが、本論は〈反出生主義〉へと集約される昭和四十年前後の〈生殖〉をめぐる澁澤の言説を歴史的に博搜し、澁澤―埴谷の間で相互的に波及した間テクスト的な影響を『死霊』の裡に探る試みに他ならない。

2 『死霊』を読む澁澤龍彦

まずは〈反出生主義〉をコードとして『死霊』を整理するところから始めてみたい。⁽¹⁴⁾〈反出生主義〉が『死霊』の中に明確な形で登場するのは五章「夢魔の世界」(『群像』昭和50・7)においてである。この章では三輪高志の恋人であった尾木節子が高志の革命運動の同志「一角犀」と心中するに至った経緯が語られる。「何故、「あのひと」は死んだのです?」という弟・与志の問いに高志は次のように応答する——「俺が、子供の存在を容認しなかつたからだ」と。高志は続けて「俺達が自らだけから発した意志、真正正銘の自由意志でおこなえることがこの人生に二つある」と問い、その一つを正しく「自殺」と答えるものの、残りの一つに思い至らない与志に対して「それは子供をつくらぬことなのだ」と明かすのである。

高志によれば「子供をつくることの驚くばかりの自然さ」は「人

間の過誤の生産と再生産の怖ろしいほどほんやり長くつづいてきた取戻しがたい無自覚」の帰結としてあり、かかる形で垂直的に「再生産」され続ける「子供の存在」は彼の志向する『《革命》』にとつて「躰きの石」以外のものではなかった。なぜなら「親のたてた崇高な伽藍のヴィジョン」は決してその「子供にうけつがれ」ることではなく、したがって「子供が生れば生れるほどそれだけ窮極の樂園のヴィジョンから遠ざかつてゆく」ことは必至だからだ。「革命の過誤と墮落のまぎれもない第一原因は革命家が子供をもつことによつてまず起る」と断じる高志は『《子供の生産》』に対する容赦もない、なんら手心も加えぬきつぱりした全否定の言葉」を断固として——たとえそれが恋人の死を招来するとしても——吐き続ける全き〈反出生主義〉者として『死霊』の中に屹立している。

ところで、この五章発表の一年ほど後に執筆された澁澤の評論が「難解ではない『死霊』について」⁽¹⁵⁾に他ならない。常に「難解」な「形而上小説」とのレッテルと共に受容されてきた『死霊』を大胆にも「エンターテインメント」小説として転回してみせるこの批評は、数篇ある澁澤の埴谷論の中でも最重要と言つてよいものだが、澁澤は右の高志の〈反出生主義〉に触れて次のように記している。

この主題は、ただちに次の「子供の生産に対する全否定」という観念を導き出すのに十分であろう。錬金術とは、自然の生殖過程なしに子供をつくり出すための理論、母の助力なしに、

父が父たることなく、人工の子供（ホームクルス）と自己同一するための理論にほかならないからだ。ところで、「子供が生まれれば生れるほどそれだけ窮極の楽園のヴィジョンから遠ざかってゆく」と書く壺谷氏は、さらにここで、歴史の視点を導入して、革命と錬金術とをアナロジカルに捉えようとするのである。

冒頭の「この主題」というのは、同じく『死霊』五章の「《死者の電話箱》」の挿話中に見受けられる「わが卓抜な《樽のなかのヘルクス》は自分だけ気のすむ《小さな神》に自らなるべく、ぶよぶよの一つまみのジェリーの塊りにまじつてその細長い、小さなフラスコのなかへ敢然とはいってしまつたのだ」といった一節の裡に「錬金術師とホームクルスとの自己同一」を濫澤が看取しての言葉に他ならない。「革命と錬金術」という大胆なアナロジは濫澤以外では容易に為し得ない、極めて特異かつ魅惑的な解釈であろう。やはり五章の中の「未来を含めた他の何ものにも頼つてはならないのが革命」であり、「意識的に創造された生」としての「革命」はそれを打ち立てた「彼自身のみ」によつて成就されねばならない」という高志の言葉の裡に濫澤は、男女両性の〈生殖〉による子供の再生産によつて現在から未来へと世代が連続していく直線的な時間性——〈再生産的未来主義¹⁶⁾〉——の拒絶を読み取り、それに代えて「母の助力なしに、父が父たることなく」成立する「錬金術」によ

る人工的な生命産出のイメージ、まさしく点としてのみある単独者による〈単性生殖〉的なイメージを謂わば無時間的な「窮極の楽園」ユートピアとして対置してみせるのだ。

こうした見取り図自体、濫澤が自らの「血肉と化した思想」と呼ぶ「直線的な進歩史観ではなくて、原型に遡るといふ形象思考¹⁷⁾」に基づくものであり、壺谷との志向的共振を浮き彫りにして興味深いのだが、この評論でとりわけ重要なのは、高志の〈反出生主義〉に引き続き五章で描かれる前衛党内部におけるツリーのな権力構造の問題に濫澤が着目し、「上部廃絶の過酷な党内闘争とは、これを家庭の領域に転移するならば、妻の人的な希望を圧殺してまで、断固として子供をつくらないようにする、夫の闘争にほかなるまい」という一見突飛な「転移」を披瀝してみせる件りだろう。さらに注目すべきは「未来の否定」と「父たること」の「拒否」を接続する中で不意に吐露される次の感慨に他ならない。

管理者の思想とは、とりも直さず父の思想だと言い換えてもよい。父は子供に仮託して、つねに「現在と未来とをごちゃまぜにしようとする」ではないか。おそらく、現代日本の文学者のなかで、この父たることを拒否する姿勢を、現実と思想の両面で意識的に守りつづけようと深く決意している人間は、壺谷氏を除いては、何をかくそう、この私のみではないかと思う。これは冗談。

「現実と思想の両面」という言葉に顕著だが、澁澤のこの『死霊』論が、埴谷の「現実」（＝実生活）と「思想」（＝『死霊』）を循環させる私小説的なモードによって読解されていることを見逃してはならない。そして「現実と思想の両面」で「父たることを拒否する姿勢」はまさしく澁澤自身のそれでもあったということ。「これは冗談」ではない。

かかる私小説的読解を澁澤が為し得た裏には、『死霊』五章発表の直後に行われた埴谷と吉本隆明との対談「意識・革命・宇宙」（『文藝』昭和50・9）の存在があったと推定される。吉本の問いに応える形で埴谷は「子供を産まないことですが、これは女房に気の毒しましたね。子供を産みたいという普通の願いをもっている女房を徹底的に弾圧して、とうとうスターリン風プロレタリア独裁を実現してしまった」と述べ、「今から告白すると、女房にまことに気の毒だけれど、四度おろさせた。そのあげくやはり害があつてとうとう子宮そのものを除去しなければならなくなった」とあまりに傷ましい（実生活）上の事実を打ち明けるのである。前衛党と家庭内の権力構造をパラレルに捉える視点はそのまま澁澤の批評に流用——埴谷の対談で「弾圧」とされたものが澁澤の批評では「圧殺」に置き換えられる等々——されているといつてよいのだが、澁澤は埴谷のこうした赤裸々な「告白」を読み、先に確認した如き矢川澄子に対して為した自らの「弾圧」を当然想起したに違いない。「これは冗談」

として諧謔と韜晦の裡に紛らせようとする身振りが逆に、異例といつてもよい澁澤の告白のさらにその背後に潜む私小説的現実を浮き彫りにするだろう。¹⁸⁾

〈実生活〉が先か〈芸術〉が先かというのはその二つがウロボロスのな循環的構造の中にある限り見定め難いのだが、自負するよう澁澤こそは〈実生活〉におけるその〈反出生主義〉を〈芸術〉として思想にまで結晶させた稀有な存在であった。澁澤の最初の評論集『サド復活』（昭和34・9、弘文堂）に始まり、『黒魔術の手帖』、『神聖受胎』、『夢の宇宙誌』へと続く昭和三十年代の批評、そして『快樂主義の哲学』、『エロスの解剖』、『ホモ・エロティクス』、『エロティシズム』へと続いていく昭和四十年代の一連の批評には、〈生殖〉に奉仕しないエロティシズムの思想を基軸として〈反出生主義〉の元に合流していく複数のモティーフが散りばめられている。問題は昭和三十年代半ばから四十年代へかけて展開された澁澤のかかる一連の思考が埴谷の裡に如何なる木霊を響かせたのか、その痕跡に他ならない。

高志の〈反出生主義〉が展開される『死霊』五章は曰く付きの章である。腸結核の悪化による埴谷の体調の問題もあり、昭和二十四年十一月に四章「霧のなかで」が中断されて以来、実に二十六年もの沈黙を経て唐突に読者の前に出来たのが即ちこの五章「妖魔の世界」であった。その長い長い沈黙期のただ中でこそ澁澤の〈生殖〉

をめぐる思考はその批評的強度を着実に鍛え上げていったのであり、埴谷の側もまたその期間に〈サド裁判〉に加わることで澁澤との親交を深め、さらに澁澤の著書への書評を幾度も執筆することを通じて自らの関心を澁澤の言説へと接続・増幅し、来たるべき『死霊』を準備していったのではなかったか。『死霊』のその長過ぎる沈黙期に両者の間に果たして何が生起し、果たして何が思想的に懐胎——〈反出生主義〉にとつて皮肉な言葉だ——されたのか、その追跡が次章の課題となるだろう。

3 『黒魔術の手帖』と「カバラ的宇宙」

まずは埴谷が一度ならず「傑作」と称讚した澁澤の二冊目の評論集『黒魔術の手帖』（昭和36・8、桃源社）から瞥見しよう。手帖シリーズの先陣を切るこの書の中でまず参照すべきは「ホムンクルス誕生」の章に他ならない。この章は澁澤が「わが国におけるすぐれたデモノロギスト」にして「悪魔学の大先達」と呼ぶ日夏耿之介の詩篇をエピグラフとし、その中に登場するパラケルススの挿話から開始される。「男子の精液を蒸留器のなかに四十日間密封せよ。液はやがて腐敗し、目に見えて生動しはじめるであろう。その後人間に似たものがあらわれる」というホムンクルス生成過程の記述を含むパラケルススの著作『物性について』を紹介しながら、「新

しい生命の造出」という「中世鍊金道士のたえざる禁断の夢」にして「十九世紀まで連続とつづく秘境哲学の核心」が紹介されていく。興味深いのはゲーテ『ファウスト』第二部の「実験室」に描かれる「ファウストの弟子のワグナーが、瓶のなかで物質を調合して製造する小人ホムンクルス」をパラケルススからの「着想」とする件りであろう。たとえば『死霊』三章「屋根裏部屋」の中に「人間を基準とする目的は無限大のなかへ消えこまねばならない」と高らかに告げる黒川建吉に応答する形で首猛夫が次のように述べる一幕がある。

——ふむ。そうだ。俺もそんな目新らしく、目覚ましいことを考えたことがあつたつけ。あのきちようめんなワグネルが手もなく足もない小人をつくりあげたとすれば、人間的な尺度から云つて、それはまさしく畸形児だが、そんな尺度など問題外とすれば、それはとにかく一つの見事な、まったく新しい創造なのだ。あつは、逸脱者たる榮譽をになう以上、何を創るかでなく、まったく新たなものを創つてみせねばならん。

この三章「屋根裏部屋」が雑誌『近代文學』に発表されたのは昭和二十二年十月から翌年三月にかけてのことであり、ここに澁澤からの影響を看取することはむしろ出来ない。だが男女両性による自然な〈生殖〉とは異なる形で人工的な生命の「まったく新しい創造」を模索していく両者のベクトル——それをさしあたり「ポスト

ヒューマン」という概念で束ねてみる事が可能だろう——を確認するにはこれで十分ではないだろうか。濫澤は評論「埴谷雄高のデモノロギー」⁽²⁰⁾の中でやはり日夏の系譜に埴谷を位置付けつつ、「『死霊』という小説それ自体が、デモノロギー的な思考によって組み立てられた形而上学的実験小説」と喝破し、「魔術大王ゲーベルだとか、黒い魔術に対する白い魔術だとか、真昼の悪魔だとか、ワグネルのつくりあげるホムンクルスだとかいった、いわば悪魔学的なテーマをもった観念が数多く封じこめられている」点を強調しているが、濫澤の批評家としてのデビュー以前に両者が出会われるべき下地は『死霊』の裡に既に十分に準備されていたのである。

さてデモノロギーの流れを汲む「ホムンクルスと生命造出」において両者の共振は明らかだけでも、問題はそうしたイメージが如何に〈反出生主義〉と切り結ぶかであろう。その点で看過できないのがやはり『黒魔術の手帖』に含まれる「カバラ的宇宙」の章に他ならない。「十六世紀の中頃、はじめて人造人間、ゴレムを造ったカバラの大家」といったエピソードと共に「正統キリスト教」に対する「カバラ的異端」の教義が概説されるこの章にあってとりわけ重要なのは、カバラにおける宇宙発展の見取図である「黄道十二宮」を图示しつつ、「宇宙の胎動期」から「地球の創造」、さらに「人類」の誕生からその行く末に至る壮大な過程が〈生殖〉の比喩と共に詳述されていく伴りに違いない。

「黄道十二宮」の図式に拠れば「処女宮」の時代において「まだ性がなく、処女生殖(単性生殖)」によって繁殖していた「人間が、「獅子宮」の時代に至ると「両性」を与えられた「アンドロギヌス(両性具有者)」となり、さらに「双子宮」に及んで「両性」が「分離」され「男性と女性」が創られることになるのだが、面白いことに我々が現在位置するこの位相にはさらに先があり、次の「金牛宮」へ移行した人間は「言語活動」を象徴するかの如き「アンテナ」(牛の角)を備えた「両性具有者」に回帰してしまうというのだ。そして最終の「白羊宮」時代では「精神は物質を脱して凝固し、だんだん天使のようなもの」となり、翼が生じた「人間は最後の段階で地上を飛び去り、さらにすぐれた惑星」に移動——したがって「白羊宮時代は、人類の最後の審判、人類死滅の日」でもある——して、辿り着いた「新しい星の上」でも「新たな輪廻」が「永遠」に繰り返されて行くというのが濫澤によって縷説された「まことに雄大な美しいカバラの宇宙論と人間論」であった。

『黒魔術の手帖』の書評(『日本読書新聞』昭和36・10・23)の中で「私達の新しい思考を揺すぶってくれ、暗黒の領域へ向かう眼をきびしく開いてくれる」とこの書を絶賛した埴谷が、「吾国の文学者に宇宙論を要求する鋭い提案」として濫澤が描いてみせた「カバラ的宇宙の壮大な構図」を挙げていることがまず注目されるが、それが如何に後々まで埴谷に深い印象を与えたかは、「宇宙論的人間

論」と副題された『薄明のなかの思想』（昭和53、筑摩書房）中の一章「性について」を参照すれば鮮明となる。「澁澤龍彦君が『黒魔術の手帖』で、ヘブライのカバラについて述べている」と切り出した埴谷は、「処女生殖、単性生殖」から始まり「両性具有存在の出現」を経て「現在どうにもものつびきならず私達がそこにあるところの男性と女性との分離」に到り、「そのつぎには唯一の性に統一された「アンテナ人間」が出現して地球を立ち去る」として右にみた一連の過程をバラフリーズしつつ、「宇宙、ユートピア」としてまことにユーモラス」と評価した上で次のように語っている。

私達がいまのいま目に見ることのできる唯一の宇宙史は、目に見えぬ精虫が闇のなかを突進して、やがて胎内瞑想する胎児となり、一つの鑄型にしゃにむにはめこまれる子供となったあと、と、やたらに無理をいつてあたりと衝突する大人になったあと、思うことの大半が空しく砕け去ったことを諦めながら死滅するところのほかならぬ私達の存在史ですが、どうやらそれに較べると、カバラの生物史は内容豊かな希望と啓示に充ちみちていて、その性の昇華のかたちだけに、ここでは目を向けることにして、性の現在には触れないでおきましょう。

おそらく埴谷は、澁澤によって描き出された「カバラ的宇宙」を『死霊』における〈反出生主義〉と接続し得るような、さらに〈反出生主義〉のその先の光景——「存在の革命」——まで啓示するよ

うなひとつの鮮烈な〈性〉のヴィジョンとして受け取ったのではないだろうか。「現在のつびきならず私達がそこにあるところの男性と女性との分離」という言い回しに明らかだが、埴谷は男女両性による〈生殖〉を用いる他ない現行の「私達の存在史」を極樁としてその限界を確認し、それを超克するものとしてカバラ的な「性の昇華」のイメージ——即ち単性から両性具有を経て男女両性に分離した性が再び単性へと回帰していくイメージ——にある強烈な示唆を得たのに違いない。同書で澁澤の「カバラ的宇宙」を引用する直前に埴谷は「人間とは人間でない何もものかになりゆくところの一種緩慢無自覚な自己超克存在である」という一節を記しているけれども、〈人間〉の後に何が到来するののかという〈ポストヒューマン〉をめぐる問いとヴィジョンにおいてこそ、両者は緊密に連繫し合ったのだと言えよう。

埴谷は「澁澤龍彦讀」（『太陽』平成3・4）の中で「生と存在の変革、という希念の人類史、妄念の精神史を、先には、悪魔学を含むところの宗教、あとには、奇想を含むところの文学に、見出してきた」と述べ、そのような少数の「現在超克、希求の精神史の担い手」として澁澤を称讃しているが、たとえば『黒魔術の手帖』の中で「カバラ的宇宙」を紹介し終えた澁澤が「しかしそれにしても、人間はどこから来てどこへ行くのであろう」と不意に問い掛け、次のような夢想を繰り広げていることもまたその証左となるに違いない。

そしてまた人間の輪廻は、まず鉱物からはじまって、植物や動物の無数の階程をふみ、現在、ようやく人間にまで到達したのであるかもしれない。／＼いや、ことによると、鉱物よりもさらに低い無機物の段階、人間よりもさらに高い有機物の段階が、永劫回帰的な宇宙の歴史のなかに、ちゃんと組み込まれているのかもしれない。……

『死霊』三章「屋根裏部屋」の中で黒川建吉によって解説される三輪与志の「虚体」という概念——「その名状しがたいものこそ、虚体です！ 三輪の問題とは、人間は、ついに人間を超え得るか、否か、だ。」——にしても、濫澤が描いてみせた「カバラ的宇宙」とりわけ最終の「白洋宮」における「精神は物質を脱して凝固し、だんだん天使のようなものに似てくる。肉体がなくなったわけではないが、肉体にわずらわされる必要がすでにないのである」とされる「地上を飛び去る」人間^{ホストヒューマン}のイメージと、その向かうべきベクトルにおいて重なりゆくのではないだろうか。キーワードとして提示はされるものの、その内実を宙吊りにしたまま展開することを余儀なくされた「虚体」および「存在の革命」のヴィジョンに、ある具体的なイメージを充填するべく濫澤の『黒魔術の手帖』が作用した可能性を勘案しなければなるまい。逆に濫澤の側にしても、埴谷のヴィジョンの裡にカバラ的な図式に二重写しにされるようなユートピアの普遍的構造を認めたからこそ、哲学的形而上小説として闇雲

に神秘化することなく、「難解ではない」「エンターテインメント」小説として『死霊』を位置付け得たのかもしれない。とはいえ、この水準での影響の指摘も未だ恣意的なものに留まるだろう。『黒魔術の手帖』以降の〈生殖〉および〈反出生主義〉をめぐる濫澤の言説を辿ることで両者の共振の痕跡をより微細に浮き彫りにすることが、急務だ。

4 『夢の宇宙誌』

——〈単性生殖〉のユートピア

『黒魔術の手帖』の幾つかのモチーフは初期濫澤の金字塔として名高い『夢の宇宙誌』（昭和39・6、美術出版社）に引き継がれる。巻頭を飾る一章「玩具について」に付された「註——ホームunkルスについて」はそれ自体独立した評論とも見なし得る質量共に充実したものだが、ここにもやはり「精液の腐敗という現象から、女性の協働なしに、人間を製することは現実的に可能」と「本気で信じていたらしい」パラケルススの錬金術が登場し、さらに「生命を再創造」するという「人類の最も古い夢」が現代の「人工受精」によって「ついに科学的真実となった」事態がフランスの生物学者ジャン・ロスタンの『愛の動物誌』を借りて次のように紹介されて行くのだ。「やがて卵子が移植されるようになれば」とロスタンは言う——「女は

子を産むために、他人の子宮を借りることも可能になる。ひとは望みのままに、父のいない生殖、胚の分溜、人間の挿木、部分的または全体的な胎生（胎外発生あるいは貯蔵瓶妊娠による）を実現することも可能になる。だんだんと、自然的人間は人工的人間、科学的人間に立場を譲ることになる」と。

後述するように、分子生物学を含む生殖テクノロジーの発展は壱谷もその晩年まで関心を持続させたものだが、昭和四十年前後の時点で「二十世紀のホムンクルス」誕生を言祝いみせるこうした言説もまた壱谷を大いに触発するものであったことを彼の手に成る書評「澁澤龍彦『夢の宇宙誌』」（『美術手帖』昭和39・9）から窺うことが出来る。壱谷は言う——「この書を開いて目次をみれば、『玩具について』『天使について』『アンドロギュヌスについて』『世界の終りについて』となっていて、註をみると、まず『ホムンクルスについて』となっているのであるから、その題目を見ただけで偏奇者特有の喜悅の戦慄が湧き起つてくるのを禁じ得ない」と。「註」という位置付けに過ぎない「ホムンクルスについて」をことさらに名指しするところに壱谷の関心の在処は明らかだが、さらに強く惹き付けられた草があったことを壱谷自身が続けて次のように明かしている。

澁澤龍彦が示すこれまでの短かい時間しかもたぬ小さな世界の不思議な細密画は、そうした変貌の異様な可能性の一端を私

達に遠い幻燈のごとくに覗かせてみせてくれるのである。殊に、両性具有についての珍らしい資料を駆使している『アンドロギュヌスについて』を読むものは、人間についての視野が一挙に性を越えた領域にまで拡がって、いつてみれば、事物の創造と変化を主宰する神の眼の位置にまで自分が投げあげられたことを感ずるに違いない。

『夢の宇宙誌』に含まれる「アンドロギュヌスについて」の章は、文学から神話、哲学、深層心理学、生物学に涉って広く「人類の共通遺産」としての「アンドロギュヌス（両性具有者）」表象を涉獵したものであり、「カバラ理論の直系」である「錬金術師たちの理論においても、ひとしく人間の完全性という概念が、男女の性別なき、単一性によって理解されている」という記述にみられる如く、先に見た「カバラ的宇宙」とも接続可能な論考となっている。澁澤に拠れば「人類の歴史は、ほとんどつねに、アンドロギュヌスとして表わされた唯一の存在が、性の分離によって、二元的な存在となる時」に開始され、「原初の樂園的な完全性と、不幸にして起った二元性との対立」の裡に進展するのだが、「墮落の結果」として与えられる男と女という「性の区分」は「人間の再統一」即ち再び「樂園」としてのアンドロギュヌスに回帰することによってしか解消し得ない、というのが神話や文学を横断して普遍的に析出される原型的イメージであった。なるほどこの原型的イメージは「カバラ的

宙」に描かれた「黄道十二宮」におけるあの過程、即ちアンドロギュヌス（獅子宮）から両性の分離（双子宮）を経て再びアンドロギュヌス（金牛宮）に回帰するあの過程を想起すれば直ちに了解されるに違いない。「子供が生れば生れるほどそれだけ窮極の樂園のヴィジョンから遠ざかつてゆく」という高志の科白もまたかかる図式の元に解説されるべきものだろう。

ところで、より重要なのはこのアンドロギュヌスのテーマから（単細胞）および（単性生殖）のモチーフが浮上することだ。「黄道十二宮」においてもアンドロギュヌス（金牛宮）を遡った原初の原初には「処女生殖（単性生殖）によって繁殖」していた「処女宮」の時代が存在していたが、濫澤はこの章でも前掲のロスタンを参照しつつ、「性も必要とせず、愛も必要としな」い「単細胞動物」の「分裂による増殖」の事例、とりわけ二つのゾウリムシが「繁殖の本能でもなければ性的誘惑」でもなく「存在の飢え」とでも呼ぶ他ない何かに牽引されて束の間の融合を果たす現象に着目した上で次のように記している。

一般に、種の増殖には必ずしもセクシュアリティを必要としない。少なくともわたしたち人類の生殖は、もっぱら性的活動に依存している状態ではあるが、しかし、自然は種族維持のために必ずしも有性生殖を唯一無二の形式として要求するものではない、ということを知っておいても無駄ではあるまい。

すなわち、他者の必要を知らない下等生物の多くは、分裂、卵割もしくは発芽という無性の繁殖にしたがっているものであり、また、ある程度まで高等な動物においても、雌のみが単性生殖あるいは処女生殖を営んでいるという例は、しばしば見られるところであるからだ。人類にしてからが、すでにマリアの処女生殖という伝説があるではないか。

この章にはアダムもまた（単性生殖）によってイヴを創造した例が紹介されているが、濫澤が（単性生殖）をこれほどまでに特権化していく背後には、生物から無機物まであらゆるものを根源的に支配しているものこそ「二元性を解消して原初の一元性を獲得」しようとする「宇宙的な力」であり、男女の「性とは、詮じつめれば、二元的になった生命の一つの表現形式」に過ぎないという冷めた認識があった。「原初の単一性に回帰」しようとするこの根源的な運動はフロイトの（死の欲動）の理論とも重ねて称揚され、逆に「ああ、性を生殖に奉仕させる理論の、ブルジョアの俗悪さよ！」といった嘆息と共に、男女両性による（子供）の再生産を至上のものとして祭り上げる国家・社会のイデオロギー性が剔抉されていく。埴谷がこの「アンドロギュヌスについて」の章の何に魅了されたかは、既にみた書評の中の「人間についての視野が一拳に性を越えた領域にまで拡がって」という一節に垣間見ることが出来るであろうし、また「明晰者・濫澤龍彦」（『文學界』昭和62・10）と題された追悼

文の中で延々二頁にわたってこの章からの引用——既に確認した口スタンによる「単細胞で構成された極微動物」の「分裂による増殖」の描写と「二元的」になった性を副次的なものともみなす記述が中心——を行い、「これらの文章に見られるごときこの「存在的異端」期の驚くべき成熟の頂点」との評価を下していることから窺えるであろう。だが何よりその触発の痕跡は『死霊』の裡にこそ見出されねばならない。

『死霊』に〈単細胞〉および〈単性生殖〉のモチーフが初めて明示的に顕在化するのは、やはり〈反出生主義〉と同じく五章においてである。高志の病床に現れた「《窮極の革命のついに果たされた自在の国》からきた」という「夢魔」が「三つの抗すべからざる存在の秘密」について順次語り出すのだが、その最後に明かされるのが「《最高存在こそ存在にほかならぬ》」という「逆説的な秘密」、即ち「それ以外の何物かによつて『馴致化』されることを頑強に拒みつづけ」るが故に継続されてきた「存在からのみ存在ができる」といった忌まましいほど無気味な、そして、腹立たしい永劫不変の単性生殖の秘密」であった。このモチーフは続く六章『愁いの王』（『群像』昭和56・4）に移行し、娘（安寿子）の婚約者である与志を案じる津田夫人と黒川建吉との対話に引き継がれていく。首猛夫によつて語られた「『愁いの王』の挿話を聴き終わり、「自らが自らの王になることのみを唯一の目標」としたその王とは与志のこと

なのかと問う津田夫人に対して黒川は次のように応答するのだ。

——三輪の位置は、それ以前なのです。
 ——え、なんの以前なのですつて……？
 ——私達が成立するまでの遠い前です。
 ——なあんですつて？ 私達が成立するまでの遠い前というのは、いつたいどういうことでしょうか……？

——それは、つまり、男と女の成立以前です。
 さらにその「男と女の成立以前」とは何かと畳み掛ける津田夫人に対し黒川は「はじめのはじめの位置」に「立ちどまり」「まつたく、孤独に考える単細胞、それがほかならぬ三輪の位置です」と語り出すのである。こうして「男と女の成立以前」まで遡行して見出される「はじめのはじめ」の「単細胞」の「位置」に与志の存在が措定される訳だが、黒川に拠れば「外界」を自身に取り入れることによつて、第二の自身に辿りゆく「類の「盲目的」な「細胞分裂」を「拒否」するが故に与志は「はじめのはじめ」の場所に滞留し「孤独に考え」続けているのであり、「自分自身だけによる唯一無二の自己増殖」によつて「全存在への反抗と拒否」を画策するその試みの極北にあるものこそ即ち「宇宙はじめて」の創出」に他ならないと言ふのだ。

もちろんここで「単細胞」はメタファーとして用いられている訳だが、そのメタファーに託されたものは実に法外と云わねばならない。

澁澤が描き出した男女両性に分離される以前にあったアンドロギュヌスの〈楽園〉^{ユートピア}、さらにそれをも遡ったところに見出されるより原始的な〈単細胞〉による〈単性生殖〉の次元がかくも特権的に顕揚される背後には、おそらく二つのモチーフが潜在するのではないだろうか。一つは澁澤によって「壇谷雄高の考え方のいちじるしい特徴」とされた「人間の意識はなんら外界を媒介とせず、なんら外界との交流を必要とせず、ひたすら内部に沈潜することによって、あたかも単性生殖によるかのごとくに生じた」という思考、即ち「断乎たる外界拒否の原理であり、単性生殖の原理」⁽²⁾がそれである。澁澤のこの指摘は『死霊』ではなく短篇「意識」に対してのものだが、「外界」を自身に取り入れること」を「拒否」して「単細胞」に留まる与志こそはその「原理」の正統な継承者と言えよう。

ところで「意識」からは直截導出されない〈単性生殖〉のもう一つの側面が、メタファーというよりは字義通りの「男と女の成立以前」というモチーフに他ならない。長い中断期間を潜り抜けた五章以降の『死霊』には「男と女」という両性をめぐる問いが次第に前景化していき、七章『最後の審判』(「群像」昭和59・10)においてそれは一つの明確なロジックを形成することになる。この章では、「食物連鎖」によって人間が犯さざるを得ない生物殺しの罪と、一匹の精子の着床の際に「四、五億の可能性の胎児達に対する一斉の大殺戮」を犯さざるを得ない生殖における「兄弟殺し」の罪とが

共に「薄暗い「存在の罍」として順次弾劾されて行くのだが、その終わり際に「はじめのはじめのはじめに出現した自己存在たる単細胞」がその「法廷へひき出さ」れ、「この俺だけが「存在の罍」にかからなかつた唯一のもの」だと啖呵を切りつつ語り出す次の一幕があるのだ。

いいかな、この俺は「他のものをとって食べる」貪食細胞の種族などとはまつたくその存在形式を異にしている本質的に至高な正覚者、つまり、文字通り、「自存存在者」の種族にほかならぬのであつて、単細胞の自己分裂後、愚かしく残忍な貪食細胞と果てもなく好色な生殖細胞になり果ててしまつたお前達、ひたすら「他」に依存する貪食者群の忌まわしい出現よりずっと前に嘗てこの大地の暗い奥底にも海水の下の地底にも、つまり、ひたすら暗い地下の奥底にこそ存在したものだ。

この「俺」(＝単細胞)は自らこそ「単独者で他者で全体者であるもの」だと豪語し、「生の全歴史を通ずる最大課題となつた「個と全体の融合」など「遠い遠い俺の時代に苦もなくすでに完璧なかたちとして実現していた」こと、「存在と生の背馳せぬ無垢な黄金時代はすでに遠い俺の時代に確然とあつたこと」を高らかに誇示していく。「無垢な黄金時代」という表現に明瞭だが、ここにあるのも「貪食細胞」と「生殖細胞」によって墮落した現在から遡行した原初に見出されるあの〈楽園〉^{ユートピア}への憧憬に違いない。だとすると

何故「無垢」な筈の「原始の単細胞」が「最後の審判」へ召喚されねばならないのか。それはその「無垢」なる「至高の正覚者」が不覚にも「進化」という名の「原始の罟」に陥ってしまったからに他ならない。つまり「ひたすら無垢な「自」のみをもつて「自」の自己審判を貫きつづけてきた単細胞の純真澄明に「自己分裂」する「裸かの魂」が、何時の間にかあの「貪食細胞」と「生殖細胞」を兼ね備えた「人間」へと「進化」せしめられてしまったその「過誤」の故に、「原始の単細胞をひそかに育てあげてしまったところの太陽も水」も共々「最後の審判」に召喚されねばならないのだ。

「食う」と産むだけの愚かしく心貧しいお前達」といった苛烈な言葉と共に「人間」存在への弾効が相乗されていくこの七章にもまた「死のなかの胎児」の挿話や「愚劣な極の生殖作業」の全否定を通して「反出生主義」が鮮明に刻印されている。そしてかかる罪深き「生殖細胞」を兼ね備えた「人間」へと「進化」しない限りにおいて「単細胞」と「単性生殖」の形象がユートピアとして特権化されて行くそのロジックも了解されるだろう。単細胞生物の誕生から約四十億年に及ぶビッグヒストリーの中で生物・人類の「過誤」を暴き、そのオルタナティブを模索していく五章から七章へ架けての『死霊』の展開は、四章から五章までの長い長い中断期における濫漑との邂逅、とりわけ「カバラの宇宙」における「性の昇華」のヴィジョン、また原初の単一性を「樂園」として特権化し、二元的

になった男女の性を副次的な頽落形態に位置付けていく論考「アンドロギュヌスについて」抜きには成立し得なかったに違いない。だがまだ疑問は残る。「男と女」という両性は何故これほどまでに唾棄されねばならないのか？——最後に「性」をめぐるモチーフがより濃密に展開される『死霊』九章を確認することにしよう。

5 男と女が何故あるのか？

結果的に『死霊』の掉尾を飾ることとなった九章「虚体」論——「大宇宙の夢」（『群像』平成7・11）は、津田安寿子の誕生会を舞台として飛び入りの黒服（単細胞）と青服（無限大者）まで含めて総勢十名の対話が繰り広げられて行くのだが、その序盤に「隣りにいる与志さんについて、朝も昼も夜も、思いつづけていますのに、与志さんが、その私をどう思っているか、まったく解りません」と安寿子が語り出し、「お伺いしたいのですけれども、男と女が、何故あるのでしょうか」と「途率直な訴え」を発する一幕がある。数隣の沈黙の後、首猛夫が次のように切り返す。

安寿子さん。いいですか。男と女、それがそこにそうしてあること、それは、まったくこの宇宙最高の愚劣だ！そして、その最高最大の愚劣こそ、まさにそれがそこにあらねばならなかった「自然の刑罰」として、のつびきならず、ついに遁れがた

くこの世にもたらせられてしまつたものなのだ!

首猛夫は続けて、「数十億年前」に「一つの隕石がこの地球に衝突」して「単細胞」が出現して以来、生命の「驚くべきほど愚劣な長い長い連鎖」が引き続き、「貪食細胞」の出現と「どんづまりの果ての愚劣の饗宴である生殖細胞のほかならぬ出現」を経て現在へと到ることとなった壮大な生物史を安寿子に解説していく。首に抛れば「男と女、が、何故あるのか」という問いの答えは明瞭であり、「孤独な単細胞」に「自己だけによる自己自身の創造」など考えさせなくし、「存在の最後窮極の秘密になど考え及ばぬように」させる為にこそその両性の分離は「自然の刑罰」として齎されたというのだ。「イヴがアダムを、この全宇宙史のなかでこの上もなく最高の最大の「単純簡明絶対」な無理屈なかたちで、好きになつてしまふ」という「自然の巧妙無比な罫」を起点として「数千年たとうが、数万年たとうが、まつたく同じ愚劣」が反覆され続けているという首によるこの苛烈な両性弾劾を背後で支えているのも、「カバラ的宇宙」の如くひたすら原初の原型へと遡るあの神話的思考であつたに違いない。⁽²⁶⁾

ところで「男と女、が、何故あるのか」という根源的な問いもまた昭和四十年前後の澁澤の言説に散見されるものであつたことをここで確認しよう。吉行淳之介他四名の責任編集による「センスシリーズ」の一冊として昭和四十二年に刊行された『直接の性』収録の二

つの座談会に澁澤が出席している。一つ目の座談会(「菓づくり」)における「ぼくが子供を拒否する理由は、父と子の関係だけです。父親になりたくないということは決定的ですね」といった〈反出生主義〉に連なる発言も興味深いのだが、注目したいのは「性の思想」と題された二つ目の座談会に他ならない。澁澤が「プラトンのセックス観はアンドロギュノスです」と切り出し、元々球形であつたものを神が半分に分断することで両性に分離した経緯を解説する中で「人間は男女両性のアンドロギュノスになるのが本来の姿ではないかな」として次のような対話が展開していくのだ。

福田 少しここで人間のアンドロギュノス妄想について形而上的な話をしましょう。

奥野 医学的に見てどうして両性があるのかな。

澁澤 そうなんだ、両性があることが、文明の諸悪の根源だ。

「どうして両性があるのか」と問う奥野健男に対し「諸悪の根源」と断じる澁澤の姿は、先に見た津田安寿子と首猛夫の応答に見事に重なり合うものだろう。座談会では「種族を保存し、バイタリティーをもつて繁殖するためには、男と女という両性が必要なわけです」と奥野が対話を引き継ぎ、澁澤が続けて「論理の発展の形式ですよ。分かれなければ進まないもの」と両性が駆動する弁証法に表向き理解を示すのだが、澁澤の本音は無論「諸悪の根源」の側にこそあつたに違いない。この対話を受けて「その弁証法的な議論は、バタイ

ユが連続と不連続という言葉を使ってやっております」と森本和夫が話を継ぐことも重要であり、バタイユの『エロスの涙』（昭和39、現代思潮社）を翻訳し、大熊信行の『家庭論』（昭和38、新樹社）を相手取り『家庭無用論』（昭和41、三一書房）を執筆して所謂〈家庭論争〉を繰り広げていたのがこの森本であった。⁽²⁸⁾「菓づくり」というタイトルに見られるように、この二つの座談会もまた同時代の〈家庭論争〉の文脈の中にあつたことは言うまでもない。

「子供の誕生がその帰結であり得るといふかぎりにおいて、エロティシズムは、そのような目的ではない」といった一節を含む森本訳の『エロスの涙』については澁澤も『夢の宇宙誌』の中で触れており、さらにその書評まで執筆しているのだが、澁澤のバタイユ言及はより早く、彼の三冊目の評論集『神聖受胎』（昭和37・3、現代思潮社）収録の「テロオルについて」の中にはバタイユ『エロティシズム』⁽²⁹⁾からの次のような引用が見受けられる。

生殖のための性行為は有性動物と人間とに共通しているが、明かに人間だけが、性行為からエロティックな行為をみちびき出した。すなわち、性行為とエロティックな行為とを区別するものは、生殖や子孫に対する配慮につながる自然目的とは関係のない、ある心理的な探求なのだ。

生殖とエロティシズムを鋭く峻別するバタイユのかかる視座は、『神聖受胎』のハイライトともいふべき「生産性の倫理をぶちこわせ」

（初出は『外語文化』昭和36・11）の中で「男女両性の自然的過程によってその数のふえて行く人間の再生産」即ち〈子供〉を生むことを「労働Ⅱ生産Ⅱ社会のアプローチ」と位置付け、それと対極にある「遊びⅡ消費Ⅱ反社会のアプローチ」としてのエロティシズムの中に「文明の原理」を根底から「転回」する革命性を見出す「消費の哲学」へと展開していく。

この「生産性の倫理をぶちこわせ」については埴谷も後年「明晰者・澁澤龍彦」（前掲）の中で触れ、マルクスからの引用の多さに「これが『澁澤龍彦』のエッセイかと、思わず筆者名を眺め直すほど」であつたというが、にもかかわらず「労働、生産、消費、を仔細に吟味した果て、そして——そして、なお、「性」を厳然と確保しつづけている」澁澤の姿勢を評価することを忘れてはいない。それはまたサドの評価と相俟つて埴谷が澁澤の裡に見出した揺るぎない可能性——〈性〉の変革を通して〈ポストヒューマン〉に到る——の中心でもあつた。たとえば、澁澤はカッパブックスの一冊として出版された『快樂主義の哲学』（昭和40・3、光文社）の中で「人間の限界をつきやぶり、人間を人間以上の存在にする」べく「アンチ・ヒューマニズム（反人間主義）」の立場を闡明しているが、その鍵を握るのが「人間の肉体的条件の根本的な変革」であり、「エロスの力」の全的「解放」に他ならなかつた。同書には同性愛を肯定する文脈の中で「子どもを生むなんて、たいしてりっぱなことではな

い」という一節も見受けられる。「エロスの運動は、生殖に奉仕しない」というバタイユを経由したエロティシズムの思想は、「人工的な単性生殖」の可能性を夢想しつつ「ヒューマニテイ」が「音を立てて崩壊」する瞬間を待望する『エロスの解剖』（昭和40・7、桃源社）へと引き継がれていく。

さらに書名からしてバタイユからの影響色濃い澁澤の『エロティシズム』（昭和42・12、桃源社）には、「男は女のたった一個の卵子のため」に「二億以上の数の精子を一度に放出」するけれども「選ばれた精子の数は、たった一個」であり、それ以外は「まるで無償の行為のように、純粹な死滅に運命づけられて」いる事態を「喜劇」とする記述もあり、『死霊』七章に描かれた「生殖細胞」における「兄弟皆殺し」への影響を感じさせもするのだが、本書でとりわけ重要なのは「性のユートピア」と題された一章だろう。「男女の性の二元的対立を統一した、未来の新しい人類は、モノセックスではなく、両性具有者（アンドロギュヌス）あるいは無性人間（アセックス）と呼ばれるべき」といったヴィジョンに始まり、「両性の結合という手続を踏まないで行われる生殖、いわゆる処女生殖（単為生殖）と童貞生殖（童貞発生）の可能性」が探究されて行くこの章では、「人間に性の区別が生じるとともに、歴史がはじまる」として原初の黄金時代から終末のユートピアへ到る歴史過程が次のように描き出されるのだ。

〈単性生殖〉のユートピア

原初の黄金時代も、未来のユートピアも、時間の停止した、歴史の外にある、永遠の現在ともいえるべきパラダイス（楽園）である。だから、そこには性がない。性（つまり二元的対立）がなければ、発展もないし、進歩も文明もない。仏教のニルヴァーナ（涅槃）の理想も、このユートピアに近いものと言えるかもしれない。このユートピアに到達するまでは（つまり歴史が終わらない限りは）、わたしたちの肉体から性の痕跡が完全に消滅するというようなことは、あり得ないにちがいない。

澁澤のこうした言説を傍らに置くことによって、「はじめのはじめの位置」に三輪与志が「立ちどまつている」とされる理由がより鮮明になるだろう。かつての「単細胞」がそうであったように「進化」することによってあの汚辱に満ちた人類史を起動させてしまうことを拒むが故に、「まつたく孤独に考える単細胞」たる与志は「時間の停止」した〈楽園〉^{ユートピア}である「はじめのはじめの位置」に「立ちどまつたまま」でいることを余儀なくされているのだ。ただし六章の中で「その踏み出しの踏み出しを考えにつづけて、三輪は、そのはじめのはじめにいまも立ちどまつているのです」と黒川建吉に解説されるように、与志が「立ちどまつたまま」でいるその状態は「過誤の人類史」とは異なるオルタナティヴへの「踏み出し」を待機させたそれでもあることを見逃してはならない。つまり我々が辿った「進化」とは異なる《進化》への「踏み出し」について「ま

一七

つたく孤独に考える「単細胞」として三輪与志はあるのだ。とはいえその「踏み出し」が『死霊』の中で具体的に描かれることは終になかったのであり、それは『死霊』の未完結性と相俟って、〈樂園〉⇨ユートピアの構造が原理的に孕む逆説に起因しているように思われる。

いずれにしても『死霊』を物語的に駆動しているのは「単細胞」として発展も進歩もない「原初の黄金時代」⇨ユートピアに「立ちどまつたまま」でいるこの与志のベクトルであり、それと合わせ鏡のようにして、高志の手に成るリーフレット『自分だけでおこなう革命』に記された「ひとりの子供だにまつたく存しなくなつた人類死滅に際しておこなわれる革命」の終末論的ベクトル（逆ユートピア）がある。「単細胞」として「男と女の成立以前」にいる与志も、「自覚的」に子供をもたぬもの」による——「単性生殖」の如き——『自分だけでおこなう革命』を画策する高志も、何れも「性（二元的対立）」がない「時間の停止した、歴史の外」の〈樂園〉⇨ユートピアの中に観念の中で微睡んでいる。「あらゆる真の革命家は《瞬間だけ》の革命家にしかならない」という高志の言葉も、未来へと発展していく直線の時間を拒絶した「永遠の現在」への希求として解説されるべきだろう。何れにしても〈単細胞〉（単性生殖）そして〈反出生主義〉のモティーフが「存在の革命」を模索する『死霊』の中核に装填されていることの意味が、「性のユートピア」を描い

てみせる澁澤の批評から浮き彫りとなる筈だ。

だがこうしたモティーフが全て澁澤から齎されたと考えたと誤ることになるだろう。埴谷は「処女マリアといふ考へ方が千年以上も続いてきたヨーロッパには、処女生殖についての関心が、想像以上に深いらしい」と始まるその名も「単性生殖」というエッセイを既に昭和三十一年六月に『近代文学』へ掲載しており、澁澤との邂逅以前からこのモティーフに強い関心を寄せていたことが了解される。既に触れたように埴谷が澁澤と面識を持つのは昭和三十六年一月のことだが、その翌月に埴谷は「文学者の性理解」（『群像』）を發表し、貧困や階級や家族の矛盾が解決に向かったとしても「結合が分離を内包している性の矛盾」はなお残り、たとえば「まつたく新しい世界にコンプルスのごとくに到着」した際には「私達は私達をどのように改造すべきかという早急な解決」を迫られるとして次のように記している。

私達は、いままでどおり、男性と女性という形態でおり、ならかの不思議なたちの気密服の發明によつて、これまでに似た性生活をつづけるべきか、或いは、ここで人類史の最後の頁を閉ざし、宇宙的立場に敢然と踏みきつて、体力のある男性だけに統一するか、または、持続力をもつた女性だけに統一するか、それとも、その新しい世界に最もよく適應するまつたく新しい存在を創成するかを壮大な人類投票によつて決定しなけ

ればならないかもしれないのである。

この批評は「思いきつた想像力の駆使によつて男性と女性の矛盾をアウフヘーベンしたところのまつたく新しい存在の創成にあらかじめいまから不在投票しておこう」として幕を閉じるのだが、こうした性のヴィジョンは濫澤を経由せずとも、埴谷の中に既に存在していたものだったであろう。⁽³³⁾ 濫澤の「カバラ的宇宙」の初出は昭和三十五年九月であり、それを讀んだ上で右の文章を書いた可能性も十分あり得る訳だが、必ずしもここでその影響を断定する必要はないように思われる。とはいえ「カバラ的宇宙」の章が如何に埴谷に深い印象を与えたかは、既にみた『薄明のなかの思想』以外にもその痕跡を確認することが可能なのであり、『死霊』五章以降の展開を鑑みる時、やはりその成立に作用した間テクスト的な影響を閉却することは許されないだろう。

たとえば最晩年の「変革の時代に」⁽³⁴⁾の中で埴谷は「今や、卵子と精子をくつつけて女性の胎内に入れ、仮の母親の中で子供を作る時代になったけれども、将来は試験管の中で子供を作るようにならないとも限らない」と述べ、「メスが子供を産まなくなるかもしれない。直立猿人はいいに雌雄のない超人類にまで踏みこむかもしれない」といった形で生殖テクノロジーの進展と〈ポストヒューマン〉をめぐる奔放な夢想を展開している。注目したいのはチャベックの『ロボット (R・U・R)⁽³⁵⁾』を組上に載せた埴谷が、人類の絶滅の後に「口

ボットの男と女の間で自然に愛が生」じて幕となるその結末は所詮「古い習慣に引きずられ」た異性愛中心のイデオロギーに過ぎないと手厳しく批判し、「一番初めの生物は単細胞で、男も女もなかった」のだとして再びあのヴィジョンを招来してみせることだ。

生物進化がずうつと進むと、元へ戻つて無性になる——ユダヤ教のカバラでは、生物は無性から始まって、両性具有になり、そして男性と女性になる。その後、頭の中に電波の発信、受信装置を備えて、また無性に戻ってしまう、人間はそうなるというんです。

これは「男と女が、何故あるのでしょうか」と問う九章発表の約三年前の言説だが、「人間はそうなるというんです」という伝聞的言い回しの裡に、濫澤から得た「カバラ的宇宙」のヴィジョンが最晩年の埴谷の中に揺るぎなく存在していたことを窺うことが出来る筈だ。さらに重要な証左として瞥見したいのが、白川正芳によるインタビュー「戦後文学と思想性」(『第三文明』昭和50・12)に他ならない。「釈迦の考えによると、結局は人類絶滅ですね。女房は持たないし、子供はつくらないというわけです」と語り出した埴谷が「人間の生の根源は、われ見つけたりにあつて、子供をつくつていく、ということにならない」と幾度も〈反出生主義〉の念を押している場面があり、「女房からいえば憤慨のたねですね」という〈実生活〉上の感慨と相俟つて私小説的な凄みを感じさせずに措かないのだ

が、「ねはんこそ永遠の生」という言葉と共に澁澤との関わりが明確に浮き彫りとなる発言がそれに続いていく。

カバラというユダヤの教義がありまして、これが生物の歴史をずうっと眺めている。それによると、生はやはり無性生殖から始まり、単性生殖に移り、そして両性生殖になって、その両性生殖が何千万年か続いた後は、やはりまた高次の単性生殖になる、という考え方ですね。男女をアウフヘーベンしてしまうという考え方なんです。ぼくはちょうど中間の両性生殖時代に生きているけれど、これは何千万年のことであって、そのうちぼくが思索者として一貫していれば、やはりすべて単性生殖になっちゃうだろうとぼくは思っているんですよ。(笑)。

この言説が発表されたのは、二十六年に及ぶ中断期間を経て『死霊』五章が唐突に読者の前に出現した、僅か五ヶ月後のことである。再度確認すれば、澁澤の「カバラ的宇宙」が雑誌に掲載された昭和三十五年から十五年もの間、埴谷は澁澤から得たこの宇宙的ヴィジョンを来るべき『死霊』の為に着実に育み続けてきたということになる。いや、十五年どころではない。既にみたように、「カバラ的宇宙」からの触発は埴谷の最晩年まで持続されたのであり、それなくしては五章の〈反出生主義〉に始まり、六章の〈単細胞〉〈単性生殖〉のイメージ、さらに七章における「生殖細胞」の弾効を経て、「男と女、が、何故あるのか」を問う最終の九章へ到る一連の

流れはあり得なかつたに違いない。高志の手に成るリーフレット『自分だけでおこなう革命』の引用を除けばことさら本論で取り上げなかつた八章「月光のなかで」(『群像』昭和61・9)にしても、「赤ん坊の小さな手首」が安寿子に強く触れた際に「海嘯が海嘯を呼ぶ凄まじい戦慄」が湧き上がり「これが、節子姉さんの『精神の処女懐胎』なんだわ!」と感慨を洩らすあの鮮烈な一幕が存在するのであつてみれば、澁澤との邂逅を経た五章以降に連綿として持続する強靱なモチーフを確認することができるだろう。

そのモチーフは〈生殖〉の如く親(埴谷)から子(澁澤)へと垂直的に伝播(遺伝)したのではない。それは時に子(澁澤)から親(埴谷)へと、いや親(子)というヒエラルキーそのものを攪乱する水平的な共振として両者の間に相互伝播したのであり、それこそが埴谷が繰り返し強調するところの、男女両性による〈生殖〉とは異なる形でスパークする〈精神のリレー〉ではなかつたか。埴谷雄高と澁澤龍彦——筋金入りの二人の〈反出生主義者〉が相互に触発し合いテキストとして織り上げた〈単性生殖〉のユートピア。未だ読まれざる『死霊』の潜勢力はその非在の場所にこそ(懐胎)するに違いない。

註

- (1) 澁澤龍彦「金魚鉢のなかの金魚」〔『埴谷雄高作品集12』所収、昭和54、河出書房新社〕。因みに両作品の影響関係の指摘は巖谷國士「澁澤龍彦の「出発」」〔『海燕』昭和63・5〕によって先鞭を付けられた。
- (2) 中村稔「埴谷さんの思い出」〔『埴谷雄高全集17』月報17、平成12、講談社〕
- (3) 高橋たか子「言いようもないことのうちの一言」〔『ユリイカ』平成14・10、臨時増刊号〕。同文の中には「子供が産みたいと言っておられた澄子さんは、谷川雁の子供を産むことをたのしみにおられた、ただ私は知っている」、「子供がいたならば、自殺などなさらなかっただろう。それにしても、なぜ？」といった一節も見受けられる。また澁澤の妹と同級生だった大庭みな子の「影法師が踊る」〔『埴谷雄高全集1』月報2、平成10、講談社〕の中に、澁澤・高橋・矢川・谷川の四角関係に埴谷が抱いた「寂然としない」思いについて触れた回想があるので併せて参照されたい。
- (4) 澁澤と埴谷の邂逅の伝記的事実に関しては、膨大な資料を駆使して澁澤の全体像を見事に捉えてみせた磯崎純一『龍彦親王航海記 澁澤龍彦伝』(令和1、白水社)に教示されるところが多かったことを付記しておく。
- (5) 澁澤龍彦『澁澤龍彦との日々』(平成17、白水社)。同書の中には「子どもを持たないことも最初からの約束でした」としてその経緯を説明する龍子夫人の述懐も含まれている。
- (6) 埴谷雄高「澁澤龍彦氏 この完璧な異端者」〔『週刊読書人』昭和37・12・17〕
- (7) 埴谷雄高「澁澤龍彦著『夢の宇宙誌』」〔『美術手帖』昭和39・9〕
- (8) 対談「埴谷雄高——不合理ゆえに吾信す」〔『正統的異端——五木寛之対話集』所収、平成8、深夜叢書社〕
- (9) 武田泰淳の〈反出生主義〉については埴谷の「武田百合子さんのこと」〔『中央公論文芸特集』平成5、秋季号〕に詳しく、「仏教徒として育った」泰淳が「何かの思想に憑かれた男性の横暴性を勝手に駆使して百合子さ

んに三回墮ろさせた」との記述がある。本論で引用した対談(註(8)と同じ)では「四回」となっていたが、この追悼文では「三回」となっている。

- (10) 矢川には他に『兎とよばれた女』(昭和58、筑摩書房)があり、「こうなると、おまえはやっぱり月並みに子供をほしがることになりそうだな。でも、そうならもうおしまいだ。ほくはぜつたい、おまえをひとり占めしておくからな。子供なんぞに奪られてたまるものか」といった「あのひと」の言葉に従う形で、「執拗に人並みに芽ばえてしまふ愛の結晶を、わたしたちは幾度むりやり摘みとって、闇に葬りすてたことでしょうか」といった記述、また「子宮のなかにおさめて、子供をできなくするための道具」である「プラスチックのウイング」など〈反出生主義〉に纏わる描写が散見される。矢川は後年、「いつもそばに本が」〔『朝日新聞』平成14・2・3、10、17〕の中で「でも考えてみると子無し主義を貫くために血を流すのはいつも妻の側だった。この理想のために夫は一滴も捧げず、「ごめんね」と謝ればそれで済む。少しおかしいんじゃない? とこちらは咽喉まで出かかったこともある」と述懐し、澁澤の〈反出生主義〉に潜む欺瞞に対する重要な批判を行っている。

- (11) 埴谷雄高「異種精神族・澁澤龍彦——癌と医者連」〔『海燕』昭和62・10〕
- (12) 「文学の本道」〔『澁澤龍彦全集13』月報13、平成6、河出書房新社〕
- (13) 〈芸術〉と〈実生活〉を循環する形で貫徹された埴谷の〈反出生主義〉については拙論「〈私小説〉としての『死霊』——〈反出生主義〉をめぐる埴谷雄高の〈芸術〉と〈実生活〉」〔『愛知大學 國文學』令和3・1〕を参照されたい。
- (14) 『死霊』と〈反出生主義〉のより詳細な分析については拙論「子供を生むこと——埴谷雄高『死霊』の中の〈反出生主義〉」〔『愛知大學 文學論叢』令和3・3〕を参照されたい。
- (15) 澁澤龍彦「難解ではない『死霊』について」(原題「難解の定説覆す エンターテインメント 埴谷雄高『死霊』」、『朝日ジャーナル』昭和51・10・1)
- (16) 「〈子ども〉」という形象を用いて「未来の形態で過去を再生産し、未

来そのものを単なる再生産の一形態として構築」してしまふ（再生産的未來主義）については、リー・エデルマン「未來は子ども騙し——クイア理論、非同一化、そして死の欲動」（藤高和輝訳、「思想」平成32・5）を参照のこと。

(17) 澁澤へのインタビュー「原型に遡る形象思考」（『日本読書新聞』昭和46・12・20）の中の言葉。

(18) 澁澤は「近親相姦、わがユートピア」（『潮』昭和47・3）の中で、「あなたはどうして子供をつくらないのですか」と質問されたときの回答として、男の子が生まれた場合「母親（つまり私の妻）の愛情は、私から離れて、男の子の方に移ってしま」うからとし、また女の子が生まれた場合には「私はほとんど確実に、妻をほっぽらかして、妻よりも若い娘の方に、自分の愛情が移」り、「もし事情が許せば、私は娘と近親相姦の罪を犯すことにもなりかねない」からと答えるとしている。

(19) 埴谷の「澁澤龍彦氏」（註（6）に同じ）に「疑うものは、彼の傑作『黒魔術の手帖』を見よ」とあり、また書評「澁澤龍彦著『毒薬の手帖』」（『週刊読書人』昭和38・7・29）にも「前に出された傑作『黒魔術の手帖』といった記述がある。因みに後者の書評には、不眠症の埴谷がアドルムなどの睡眠剤（＝毒薬）を常用し続けた蓄積によって「もし私が子供を生むという忌まわしき事態にでもなったら思いがけぬ被造物が私の前に出現することになるだろう」とする興味深い一節も存在する。

(20) 澁澤龍彦「埴谷雄高のデモノロジー——銅版画の雰囲気」（『國文學』昭和56・11）

(21) この章の初出は「マガリア・セクスアリス（黒魔術の手帖2）」（『宝石』昭和35・9）である。

(22) 「生来、自然科学の本にはあまり食指の動かない」という澁澤が例外的に愛読し度々引用したジャン・ロスタンについては澁澤の「ある生物学者について」（『現代思想』昭和48・1）に詳しい。「ロスタンの専門は発生学と遺伝学で、とくに人工単為生殖（処女生殖）と、染色体の分裂の研究によって知られている」と澁澤は記しているが、ロスタンの日本への紹介は早く、昭和二十八年に『生物学の潮流』（丹羽小彌太訳、みすず書房）が、その後も『生命この驚くべきもの——人間の運命』（寺

田和夫訳、昭和30、白水社）、『人間は改造されるか』（丹羽小彌太訳、昭和32、講談社）が刊行されている。特に『人間は改造されるか』は澁澤もこのエッセイで言及しており、「人工処女生殖」に一節を割き「人間改造の可能性」を多角的に追跡する同書は、澁澤・埴谷の（ポストヒューマン）的言説に少なからぬ影響を与えたと推測される。

(23) 例外として四章の中に、高志の恋人であった尾木節子の妹の恒子に対して与志が語る挿話——「兄とそっくり同じ子がひとりだけ生れれば好い」と願っていたという三輪家の祖母の話——があり、この挿話は「三輪のお祖母さんは、高志兄さんとそっくり同じ氣質、同じ勇氣、同じ体格をもつた子供を産めないものときめて、姉を三輪家へいれるのに強く反対していました」と節子が当時を述懐する八章へと引き継がれることになる。奇妙という他ない三輪家の祖母のその要求の実現は殆ど高志のクローンだけが実現できるものであり、ここにもまた（単性生殖）のモティーフを読み込むことが可能だろう。

(24) 註（1）に同じ。澁澤は同論の中で、埴谷の短篇「意識」の主人公が「私達のすべてがそのかたちを変え積みあげてきたその太古から、遠い霧のなかへかたちもなく沈みこんでいるような遙かなあの終末」に渉る「鬱鬱たる系統発生」について「物思い」に耽る場面を取り上げ、『死霊』五章にも「ほとんど同じ幻想」が出てくるとした上で「これが埴谷氏のいつも最終的にたどりつく、千篇一律のユートピア的、終末的幻想」と指摘している。（単性生殖）のユートピアをめぐる本論にとっても看過できない言説だろう。因みに前掲「難解ではない『死霊』」について（註（15）に同じ）にも、ニーチェに擬えつつ、「存在論と生物学的進化論との奇妙な詩的混血児のごときユートピア思想」を「死霊」の裡に垣間見る澁澤の思考が展開されている。

(25) 単細胞生物から多細胞生物への「進化」によって、何を得て何を失ったのか、ここで辻村伸雄の論文「肉と口と狩りのビッグヒストリー——その起源から終焉まで」（『たぐい』平成31・3）を借りて整理しておこう。約四〇億年前に生命（原核細胞＝単細胞生物）が誕生し、「十九億年ほど前に、体内にミトコンドリアや葉緑体を棲ませた真核細胞」が現れ、「真核細胞が多細胞化した結果、動物、植物、菌類が生まれる」

のだが、「多細胞生物が有性生殖を行うようになると、個体の死が運命づけられる」として辻村は次のように続ける——「元来アメーバのような単細胞生物には寿命がない。アメーバは二つに分裂することで子孫を残す。それらはひからびたり飢餓に陥ったりしない限り、いつまでも生きていくことができる。ところが、多細胞生物の細胞は、子孫に受け継がれていく生殖細胞と一代限りで使い捨てる体細胞からなっている。生殖細胞が受け継がれる限り生物種は存続するものの、体細胞はいつか必ず死ななければならない。このことがのちに、人間が死や限られた生について思い悩むことや、他の生命を奪うことに罪の意識を覚えることにつながっていく」。辻村に拠れば「宇宙が始まってから現在まで人間の知りうる歴史のすべてを総合し、未来を展望できるような全体の物語を、現代科学にもとづき再構築」するのが「ビッグヒストリー」の概念だが、埴谷の思考、とりわけ『死霊』は右に見たような〈単細胞〉から現在に到る「ビッグヒストリー」に応答し、その限界が明らかかな〈人間中心主義〉を超越するべく、今ここにあるのは異なるオルタナティブなヒストリーを構想する点で〈人新世〉が孕む喫緊の諸課題と響き合うアクチュアリティを有するだろう。

(26) 浅羽通明は『濫澤龍彦の時代——幼年皇帝と昭和の精神史』（平成7、青弓社）の第三部第二章「新しい知の台頭——七〇年代と濫澤龍彦」の中で、濫澤が『神聖受胎』や『夢の宇宙誌』で六〇年代から先駆的に展開した「進歩史観を相対化する「反歴史主義」の思想」が、濫澤自身の意図と関わりなく、あるいは意図に反して、七〇年代に到り文化人類学や記号論、構造主義など「ニュー・アカデミズム」へと流入していった歴史的過程を追跡している。『死霊』四章の中断から五章が突如発表された一九七五年に到るまでの空白期を扱う本論にとって重要な示唆を含む指摘であり、「反歴史主義的な形象思考」が否応なく帯びる歴史性として、『死霊』をより広い同時代のパラダイムの中に位置付ける視点を要請するだろう。

(27) 吉行淳之介・本明寛・福田義之・安野光雅・林光責任編集『センスシリーズ 2 直接の性』（昭和42・7、文理書院ドリム出版）収録。

(28) 〈家庭論争〉についてここで詳述はしないが、この座談会に参加して

いる奥野健男の「『家庭』の崩壊と文学的意味——純文学は可能か（への四）」（『文學界』昭和38・4）が太宰治から第三の新人まで文学における〈家庭〉の変容を論じ、森本和夫もやはりバタイユを引きながら「セックスの形而上学——セックスからエロスへ」（『展望』昭和40・4）を執筆し、その末尾には本論でも後掲する埴谷の批評「文学者の性理解」を引用するなど、本論とも密接に関わる同時代の論争であったことを付記しておく。

(29) 濫澤龍彦「エロスの原理をさぐる『エロスの涙』」ジョルジュ・バタイユ著（森本和夫訳）（『図書新聞』昭和39・6・27）。なお濫澤によるこの書評は、森本和夫による書評「永遠の夢の具象化を 濫澤龍彦著『夢の宇宙誌』」と同時に掲載された「交換書評」であった。

(30) 濫澤のバタイユ言及では早いものとして書評「侵犯の勇氣こそ真正の作家のもの G・バタイユ著『文学と悪』」（『日本読書新聞』昭和34・6・22）等がある。

(31) 『神聖受胎』にはバタイユ「エロティシズム」（一九五七）の同一箇所（序章からの引用が複数見受けられる。因みにバタイユの「エロティシズム」は濫澤自身が翻訳し、昭和四十八年に二見書房より刊行された）。

(32) たとえば、「男と女」という通常の関係のほかに女と女、男と男という組合せが現われることは、サドにおいては男女の性の差も無視され、両者が無差別なことを示している注目すべき点」として、「乱交」によって「個と全体との融合の驚くべき解決法」に到達したサドをドストエフスキーと並ぶ「不可能性の作家」として絶賛する埴谷の「サドについて」（『白夜評論』昭和37・6）等を参照されたい。

(33) 他に『遊』（昭和57・7）の特集「一撮写心帖 私が撮ったこの一枚」に埴谷が自ら撮影した写真と共に寄稿したエッセイ「男と女、と、雄と雌」なども、必ずしも濫澤からの影響を速断する必要のない言説に思われる。引用しよう——「この写真の特徴は、男と女、とともに、雄と雌の鳩が樹々の緑を背景に偶然並んで、眺めに眺めている裡に、困ったことに数億年もの「進化」とやらを果したのちにも、「たつた」つしかない性」という与えられた枠をいまだになお越えられない私達の生すべての哀歎と愚劣のいりまじった悲哀感に次第につつまれてくることである。鳴

- 呼！。
- (34) 埴谷雄高「変革の時代に」(原題「埴谷雄高時代を語る」、『東京新聞』平成4・3・16(19))
- (35) 埴谷のエッセイ「宇宙ロボット」(『グラフィケーション』昭和45・2)には、青年時に「カレル・チャペックの『人造人間』を築地小劇場で観た際の回想があり、ロボットの形象があまりに「人間的」であったことへの落胆の記憶が語られている。また濫澤の『夢の宇宙誌』の「玩具について」の章に、ホフマンの『砂男』やグスタフ・マイリンクの『ゴレム』と共に「自動人形の歴史にきわめて深い関係」があるプラハが生んだ「人造人間小説を書いたカレル・チャペック」といった記述がある。
- (36) 他にも立花隆との対談「無限の相のもとに」(平成9、平凡社)の中に、「カバラがいう人類の未来というものは、いちばん始めは単性ですけど、未来も一種の電波人間みたいにあらゆる情報が全部分かっちゃって、男でも女でもないんですよ。ユダヤ人もカバラというものでずいぶん考えたらしい」といった埴谷最晩年の発言が見受けられる。濫澤の「カバラ的宇宙」からの影響は明らかであろう。
- (37) 男と女の(生殖)によって遺伝子を伝播していく親子関係(家族)を(垂直)軸に位置付け、それとは異なるオルタナティヴを「単細胞」に始まる異種間の(水平)軸の繋がりに見出す埴谷の思考は、たとえば前掲『薄明のなかの思想』に収録された「死について」の中の次の記述に鮮明に現れている。長くなるのを厭わず引用しよう——「生」と「死」という対比を考えてみると、「生」は、どのようなかたちの生であれ、それを何処までも遠くさかのぼっていけば、ついに一つの単細胞に必ず達するわけで、私達が現在見知っているすべての生物がそこから出てきたとすると、この地上のすべての生物は、互いに兄弟であるということになりますね。つまり、「生」は一つの大きな共同性をもっていて、垂直に、縦に辿ってゆけば次第に純な家族を見出し、水平に横を眺めてみれば、もはや果ても見透し得ないほど巨大で複雑で多様な生の家族構成をもっている。
- (38) (精神のリレー)については、「思想というものの特性は、ある触発性をもっていて、それに触れるものに向かってある精神のリレーの競争者

になることを強要する」とする埴谷の「精神のリレーについて」(埴谷を著者代表とする講演集『精神のリレー』所収、昭和51、河出書房新社)等を参照されたい。その(精神のリレー)が所詮男同士のホモソーシャルな連帯に過ぎないのではないかという批判は当然あり得るだろう。(単性生殖)のユートピアの背後で矢川澄子や埴谷の妻・敏子夫人が包懐せざるを得なかった問題はまた改めて問われねばなるまい。埴谷の(反出生主義)に向けられたフェミニズムからの批判については拙論(註(13))を参照されたい。

※ 『死霊』の引用は全て『埴谷雄高全集 第三巻』(平成10、講談社)に拠る。引用に際し適宜旧字体は新字体に改めた。引用文に付した傍点と省略記号(……)は引用者に拠る。各言説における濫澤の名前の表記は発表媒体によって「洪沢竜彦」等の揺れが見られたが、本論では全て「濫澤龍彦」に統一した。